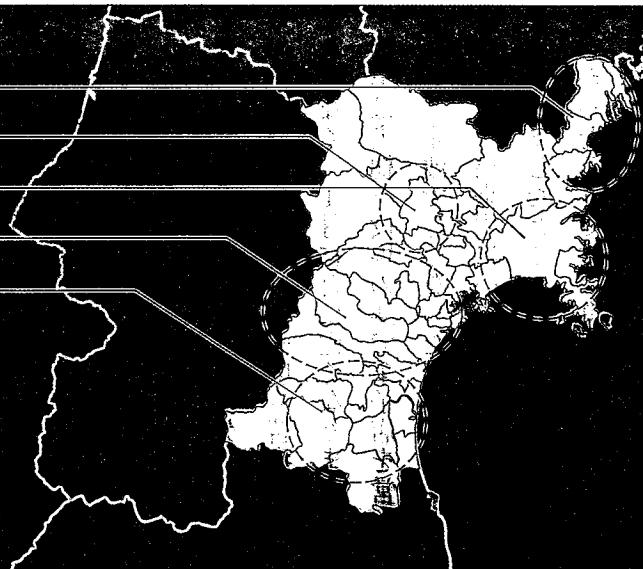
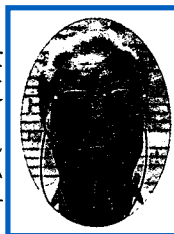


宮城支部

気仙沼クラブ
大崎クラブ
石巻電友会
五ッ橋クラブ
仙南OB会



私の東日本大震災



気仙沼クラブ
熊谷 省二

・津波なんか考えもしなかった

あの日自宅でテレビを見ていた。ドーンと突き上げる大きな揺れに、立ち上がろうにも立ち上がれない。家が潰れるかと思った。

地区の人的被害の有無を確認するため、声を掛けながら全戸を回り、津波のことは全く考えもしなかった。

・津波でんでんこ

30分後、全戸の無事を確認し家に戻り、近所の人達と道路で「凄い地震だった、怖かった」など騒いでいた。国道の方で「津波だ！逃げろ」との声に松原の方を見ると、山と山との間を「ゴゴウ！バリバリ！」という音と共に「真つ黒なヘドロのような化け物」が水煙を上げながら押寄せてきた。

車にお年寄りを乗せ逃げる人、そのまま高台へと逃げる人、お年寄りを抱えながら逃げる人等、それぞれがでんでんバラバラに高台へと逃げた。私は、何故か家の脇の山に逃げず、200m程離れた向いの高台へと逃げた。またどのように逃げたか全く記憶がない。

・地区の被害状況は

犠牲者は5人（高田市街地勤務で2人、高校生1人、自宅2名）、25軒中、家屋の流失13軒、全壊2軒、床上浸水5軒、無事の家屋5軒。我家は全壊したが家は残り、全員無事だった。

・被災者は、お客様になるな。自ら行動を

津波が治まった後、プロパンガスの元栓締り、高田市街地から流れ付いた女性の救出。津波で汚れた湧き井戸を掃除し水を確保、流れた灯油缶を拾い、ストーブで暖をとる無事の家から米、味噌、醤油などを拠出してもらい、近くの部落からおにぎりの差入れなどもあり、暖かい食事をする事が出来た。

利用できる物は利用し、出来ることは全員でやった。避難先の荘厳寺には、総勢51名。布団、毛布などの差入れもあり、足りない分はストーブで暖を取りながら一夜を過ごした。

翌日から、皆で協力し団体行動をしようと話し合い、女性は炊事・洗濯・お年寄りの面倒を見る。男性は道や残った家のガレキ撤去をすることなどを確認、いつの間にか代表となってしまう。

先ず安否情報の立看板を家毎に設置、順番に残った家のガレキ撤去など地区総出で行い約1ヶ月ほどかかった。連絡取れなかった寝

たきりの母娘が発見されたのは、最後に残ったこの家の片付けをした時だった。

また義援金を集め、食料やガソリン、作業用品などを購入し、5日目には、お年寄りを住田病院に連れて行き、6日目には無事だった家の五右衛門風呂を借りて入浴。皆いくらか落ち着きを取り戻した。まさにサバイバルだった。

・日頃の付き合いと団結力が復旧を早める

このように協力・協同出来たのは、日頃の付き合いと共同作業・お祭りや虎舞・運動会など皆でやってきた積み重ねのお陰だと思っている。その後は全国から駆けつけたボランティアの支援で、地区の後片付けも終わる事が出来大変ありがたかった。

・仮設住宅に入居、そして竹駒食堂の開店

竹駒小学校仮設住宅に入居できたのは、2ヵ月後の5月12日。96戸301名の被災者が入居。自治会長となり食料の配分、支援の受入、回覧の発行、苦情処理など忙しい毎日だった。

「みんなで頑張ろう選手プロジェクト」の「支援したいという熱意と情熱」に負けて「竹駒食堂の代表責任者」までさせられてしまった。

自宅をリフォームし仮設から引越し出来た

のは24年12月9日だった。

電友会、自衛隊・警察・ボランティア・消防団など多くの方々からご支援頂き、大変ありがとうございます。

負けでられねえ



気仙沼クラフ
斎藤 隆

私は今、新築したばかりの家のリビングのソファに腰を掛けて庭を眺めている。2年半前のあの忌まわしい大震災時の、精神状態からは想像することができない位落ち着いている自分がある。

大震災当日は畑で農作業をしていた。立っていられない程の揺れに、思わずその場にしゃがみ込んで、近所の家々を見渡すと今にも倒れんばかりに大きく右左に揺れている。自治会自主防災組織の役員をしているので避難場所等を提供するため自治会館に向

かった。すでに加工団地の従業員多数が避難し、不安げな表情で話し合っている。会館を開け中に入ってもらっていると他の役員たちも続々と来た。ラジオ、懐中電灯などを点検していると誰かが「なんだあの音は」「あ

の白い煙は」と叫んでいる。急いで高台に上ってみたら真っ黒い巨大な波が、家や車と一緒に目の前の商業施設の屋上を乗り越えて押し寄せていた。その晩は、近所の叔父の家に厄介になった。電気がない中一睡も出来ずに、けたたましい消防のサイレンの音と、時々たま破裂するタンクのボンボンという音を聞いて過ごした。眠れないので外に出てみると東の上空が真っ赤である。油に引火し火災が発生したのであろうと推察した。夜が明けるのを待つて自宅に行き、昨日と同じ無残な姿を見た時は、ああ、やはり夢ではなかったのかと改めて愕然とした。道路より1メートル高い位置にある我が家が、床上1メートル50センチも浸水し外壁には多数の穴が開き、物というものが皆倒れ壊れている。離れは基礎から外れて移動していた。それらを目の当たりにした時、全身の力が抜け落ち頭が真っ白になった。2年前に退職を機にリフォームしたのにと、涙をこらえ現場で1時間位茫然としていたのを覚えている。

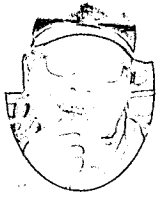
翌日より自宅の後片付けを開始した。とにかく何から手を付けてよいか判らなく、手当たり次第に裏の駐車場に運び出したことを覚えていた。1階は駄目でも2階が無傷状態だったので、着るものには不自由なかった。

午前中片づけて午後は2階で体を休めた。昼休みをしていると下の方から何か物音がするので降りていくと、女が2人物色していたので、「何してんだ」と詰問すると外国語で何か言っ走り去った。物騒なことだ気を付けな

いと。その様な片づけ作業も約1か月で終え、風呂、飯の台所を作り2階に引っ越した。こんなに早く終えられたのも毎日のように手伝ってくれたご近所、親戚友人の方々はじめ遠くの方から安否を心配し食糧や日用品を送ってくれた元同僚たち。そして事あるごとに足を運んでくれ、物心両面で励ましてくれた退職者の会、電友会の役員の方々達。皆様方のおかげだと私はじめ家族一同心より感謝しております。有難うございました。

そろそろ鮭漁が開始、寒いけど後ろを見ても始まらない、前を見て前進あるのみの気持ちでこれからも進みたいと思っております。

プールからの避難



気仙沼クラブ
佐々木 洋一

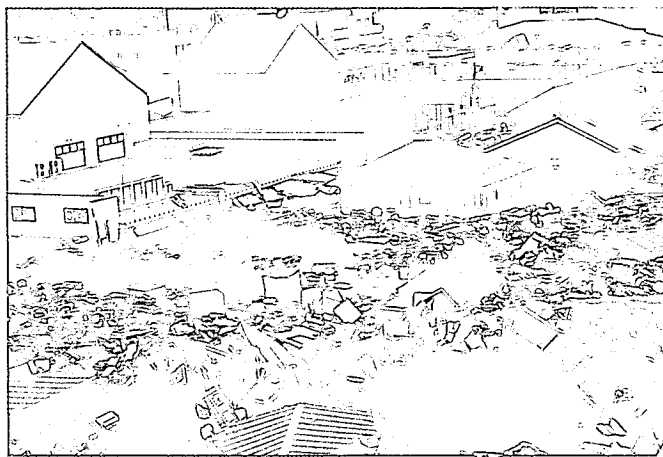
14時46分には何処にいたか？

プールで遊泳中。後20m位で「本日の目標トータル2500m」。かつて経験のない凄い強い揺れがあつて、すぐ「地震だ！」と感じ水から上がろうと思いましたが。スタッフにも「佐々木さん、早く上がって！」と言われても揺れが強く、やっと這うようにしてプールサイドに立ち上がり、着替えしようとしたもののスタッフから非常口に来るように指示を受け、他の遊泳者2人(女性)とスタッフでいつでも屋外に出られるよう待機。外では自分のワゴン車が15〜20cm位ボンボン弾んでいました。かつて見たことない情景でした。寒さも加わり震えながら眺めていました。揺れは長く強く、バスタオルを掛けていただきながら揺れを待つのみでした。これは絶対大きい津波が来ると確信。揺れが止まっすぐ着替えをし、車で500m先の自宅を目指す。避難をする車の列を横切る状態でした。交わる道は渋滞気味でした。

家に着いたら液状化が凄かったようですが取り敢えず一段落した様子。自転車と125ccのバイクは横倒し、玄関前も泥沼状態で階段を上げられず、ジャンプしましたが泥の中に着地。靴は泥の中に…。玄関で妻を呼ぶも返事が無く、慌てて2階に上がっても返事はない。もう一度呼び掛けたらベランダで返事

がある。取り敢えず一安心。ノートパソコンと小型ハードディスクを2階の畳上に置く。まさかここまで上がるとは思わない。

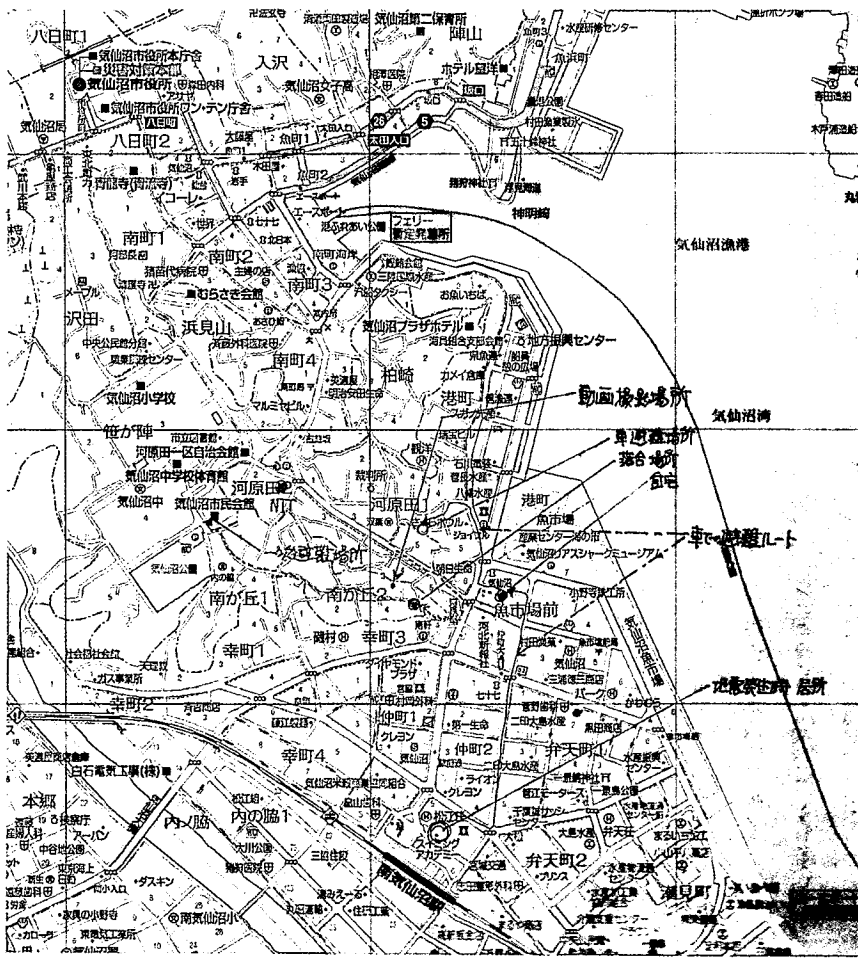
とにかく寒いので防寒着を着て長靴を履いて、妻は近くの高台(200m先)へ、自分は車を前年のチリ津波の際避難させた高台へ(後で確認したところ、あと1mで車も水没でした)。落ち合う場所を決めておいた。15時5分前には高台に避難完了。5日前に手に入れたカメラを持って避難中の車や人を撮り始めました。避難の車は渋滞しながらも西へ南へと動いていました。その後我が家の見えるところまで移動。



押し寄せたガレキ (3.11 佐々木さん撮影)

15時31分眼下にチヨロチヨロと第1波らしき10cm位の波が走るのを見てシャッターを切り始めました。湾内にカメラを向けると既に漁船やフェリー・クレーン船等が動いており良く分かりませんでした。15時33分には眼下に濁流が押し迫り、撮り始めた動画に我が家を2階まで飲み込み、更に物置が近所の住宅と共に流される様子が写っていました。更に濁流になった津波が浮き上がった建物をギ

シギシ音と土煙を立て、鉄筋の建物壁面を擦りながら列をなして押し流される様は、かつて見たインドネシアの津波を思い浮かべました。凄まじい威力です。我が家の状況を見ても涙も出ませんでした。避難して見ていた人達も諦めが付いたのか誰1人泣く人は見られませんでした。毒気が抜かれたような気がしました。(震災時避難の体験です)



震災当日の避難ルート

震災を被けて思った事

まさか自分がこの様な大災害におそわれ避難生活をし、仮設生活をするなんて思った事も考えた事ありませんでした。阪神・淡路の震災、新潟、三宅島等今迄私は心から手をさしのべた事があつたらうか。郵便局からの見舞金の振込をし、わずかの衣類を送つただけで支援した気持ちで過ごして来た自分から恥じております。全国の方々から寄せられる心暖まる支援の数々、それは物であつたり、お金であつたり、労働力であつたり、2年半過ぎた今でも支援が続けられております。夏のあつい中ガレキの撤去作業、慰問、本当に頭が下がります。私もいつ迄も被災者で居ては駄目だ!!皆さんの支援に因るためにも復興者にならなければとその想いから仮設の人達に呼びかけ復興地蔵の制作に取り組みました。それには電友会の皆さんからの暖かいご支援の注文を頂きました。NIT労組新聞でも取り上げて頂きました。本当にいろいろと感謝しております。有難うございました。組織の力つてすいなって思いました。今は注文は少なくなつて来ておりますが、細々と



気仙沼クラブ
佐藤 京子

制作に励んでおります。皆さんからのご支援のお蔭で被災者から復興者になる事が出来ました。そして1日も早くふる里に帰る事を望んで頑張っております。最後に1つだけ。(非国民と思われそうですが) 今回のオリンピックの誘致決定で東京に全ての関心が向かっています。スポーツは確かに元気をくれますがテレビを通してでも元気を貰えると思います。これが福島はじめ被災地復興の足かせにならなければ良いという気持ちも私達被災者の本音である事も分かってほしいと思っています。仮設の人達は皆んな高令です。生きている内にふる里に帰えるだろうか?と皆さん話します。

あの時を顧みて

気仙沼クラブ
佐藤 敏子

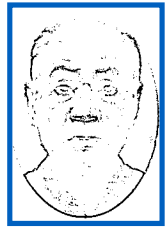
けたたましい携帯のメール音、異様な気配を察知して自宅へ急ぐ。途中大渋滞に巻き込まれた。防災無線からは大津波が来るので高台へ避難して下さい、運転者は車を止め鍵をかけたままにして徒歩で避難して下さいとくり返しくり返し呼びかけていた。私はラジオ

を聞きながら何んとか家に辿り着いた。庭に車を止め、定められている避難場所(高台にある八幡神社)へと向かった。駐車場まで行くと今まで聞いたこともないすごい轟音がバリバリと……何が起きたのだろう、一瞬何が起きたか分からなかった。下手の方を見ると見慣れた家々、のどかな田園風景は皆無くなっていた。1軒のみ屋根の部分を残して全部水没してしまった。その時間は僅か数十秒足らず。大きな大きな震災にただ、ただ茫然……。避難所へ着くと目はうつろ、顔は蒼白言葉を失った人達が右往左往していた様になります。夕方になると小雪がちらつきそれが霽となりとても寒く厳しかったです。それにひきかえ夜は空高く、空気は澄みわたり星空とお月さんがとても美しかったのが印象的でした。今現実起こっている事態と裏表でも悲しくもありました。

一方、内湾で大災がおきました。ドドーンとすぎましい爆発音と同時に白煙、火柱とあちらこちらから上っていました。夜になると筏に火がつき寄せては返す波に乗り行ったり来たり。ゆらりゆらりと動く炎は海面を覆い移動する光景はこの世の出来事とは思えない異様なものでした。頭にこびりつき今だに離れません。向いの大島まで火の子が飛び移り

山火事となり白煙、火柱があらこちらに見えます。ヘリコプターで消火剤を降下する様子が何日も続きました。どの様に表現しているか言葉が見つかりません。本当につらかったです。人はあまりにもむごい事に当ると声も出なくなるものだとつくづく思いました。そしてこの度、電友会を始めとするNTTグループの方々、友人知人、趣味を通じて知り得た全国の仲間からお見舞やら励ましのお言葉を沢山いただきました。中でも電友会の方々の安否の確認です。役員の方が災害発生から間もなく我が家に来ました。その取り組みの早さにビックリもしましたし、元氣もいいただきとても嬉しかったです。ライブラインも整わない中でのお見舞に改めて感謝申し上げます。発生から2年余り経ち皆様からのご支援や励ましが強い力となり私達家族の肩を押して下さいました。とにかく目の前の身近な仕事をこなしている間に徐々に何をしたいのか、何をすべきかと迷いながら生活していると心も落ち着き一歩前に進むことが出来ました。今は元気に暮らしております。本当にありがとうございます。

東日本大震災を経て



石巻電友会
大宮 敏彦

平成23年3月11日、14時46分東日本大地震・大津波・発生、石巻海岸沿い全滅状態発生、自宅も全壊、私は当時地震あとの家のかたづけをしていました。家内に道路に水が流れているよといわれ、水道管が破損したのかと思いい家内と家の裏に見に行つた瞬間、いつきに水に押され二軒隣の台所の出窓まで流されしがみつき、濁流が引くのをじっと我慢（1時間位）していましたが、ますます流れが早く車ごと流されていく人達を何人も見ていました。私と家内はどんどん濁流が増水し、首まで上がり伸び上がるが次第に苦しくなり私はいちか、ばちか、漂流物の流れの早さに負けないよう必死でまた隣の駐車場の屋根に登ろうとするが雪が降っていて滑ってあがることもできず何度も沈んだりヘドロ海水を何度も飲み込み、松の木につかまりガレキと漂流物の流れをいく度か通り抜け屋根にはい上がり屋根づたいに他家の窓をはたき歩きなんとか助けてもらいました。家内はまだ窓にしがみつきました。助けていたが家の方に家内を助けに行くから紐をお願いし衣

類を何枚か結んでもらい、助けに行くも、濁流の中、ガレキにはいあがり紐を投げるも届かず再度戻りもう一度紐を長くお願い頼むも自分低体温になり意識がモウロウとなり（5時間位）なにがなんだかわカラズ家の方にマッサージや衣類を取り替えていただいたことは覚えていました。意識が戻り家内はと聞くと出窓にぶらさがった家の方に助けていただいたとのことでしたが次の朝までわかりませんでした。3日目になんとか避難所へ行くようになり、大街道小学校く仙台く涌谷の親戚の家を転々とし仮住まいを模索中、涌谷のアパートに落ちつきました。当時は心も身体も混乱し恐怖ばかりがよぎっていました。震災発生から2年7ヶ月もなります。皆様か



庭への漂着物（平成23年4月7日撮影）

ら大変なご支援、又手のほどこしようななかった床板、床下、恐ろしい塩分を吸収した悪臭のひどいヘドロを撤去していただき有り難うございました。おかげさまで家の再建も無事完了し、平成24年12月28日をもって石巻へ戻ることができました。帰りたいけど帰れない人達が一杯おられます。私達は幸せです。ほんとうにつらかったあの日、あの時、あの頃、そして伝えるゆとりができると思えるその日まで頑張ります。

東日本大震災を体験して

石巻電友会
石森 八重子

突然ゴーツともの凄い音がして家が揺れた何度も何度も繰り返して、間もなくけたたましくサイレンが鳴った。

「大津波警報発令、大津波警報発令、ただちに高台に逃げて下さい」と放送があった。急ぎ外に出る。たくさんのゴミを押しながら波が坂道を押し寄せてきた。

津波の第一波である。廻りを見ると、あるはずの家並がない、そこにはないはずの家のトタン屋根が見えた。浮いていたのである。小

高い丘にいた近所の人がかつち、かつちと手招きしながら私を呼んでいた。夢中で走ったその時にダンナさん車ごと流されたよ」と言われた。驚きの声も出ず、何も考えられず、頭が真っ白になってしまった。とにかく逃げようと言われ避難所となった小学校に藪をかき分けながら逃げ、辿り着いた。校庭は大勢の人でごった返していた。海の方を見てびっくり、家が渦にまかれながら流されていた。映画のシーンをしているようであった。

小刻みに地震は絶え間なくあり、息をひそめ、津波が治まるのを待つ。

少し落ち着いた頃、各自教室に入る、一部屋に30人位、体育館にあったマットが敷いてあった。数少ない毛布、タオルケットの引っぱり合い、直接言われた訳ではないが、じゃま」などと言う人もあり心が痛んだ。男性の人達は廊下で体育館の暗幕をはずし身体に巻きつけイスに座わり寒さをしのいでいた。とにかく寒かった。午後11時頃だったと思う。暗い中で主人の声を聞いた。アーツそれだけの声しか出ず、良かった。主人は小学校から自宅が近かったので、家にある米、水、あるゆる食料品、毛布など持ってきたと言っていた。自宅は浸水はしたもののかるうじて流出を免れていた。皆さんで食べた。又断水の為

男性4〜5人で水洗トイレの水を小学校のプールから運び方をしていたとのこと。それは神戸震災のトイレの問題が脳裏にあったので一番手をかけなければならぬと常々言っていたのです。次の日さつそくに皆さんで消防車のホースを利用し、川の上流からホースを接ぎ合わせて校舎屋上のタンクに給水するようにしたのです。しかし、浄化槽が溜まる一方だったので地元にある養豚場のバキュームカーを利用することで対応出来たようです。水洗トイレの水は確保出来たけど大事な飲料水、生活水の確保が少量であった。町の水道の貯水池から直接ポリタンク10本位づつ日に3回運び方をした。とにかく車が通れるよう、ガレキだらけの道路の整備をしながらの作業なので大変だったかと思う。一方、女性の皆さんは日に3回のたき出しの準備、地域で農家をしている方からの米のさし入れ、水産加工場からの海産物の差し入れ、養鶏場からの玉子の差し入れ、地元の人が船長をしている遠洋漁業船からの差し入れ、これは、たまたま静岡焼津港から出港の準備をしていたとき家族からの知らせで急遽出港をとりやめ、仕込んでいたものを救援物資として二度も往来し届けてくれました。当地はもとより隣りの地区へも配ってくれたとのことです。

ありがたく忘れることが出来ません。徐々にはありますが、各方面からの支援もあり当地区の避難所での食料については不自由を感じなかったように思います。聞くところによれば、ビスケット1枚などというところもあつたとのこと胸が痛みます。

避難してから2週間位過ぎた日、連絡の途絶えていた娘がリュックを背負い教室に入ってきました。長ぐつは泥だらけでした。人目もはばからず抱き合いました。本当にうれしかったです。被害の少なかつた職場に同僚と一緒に朝食を共にしていたとのことでした。30分もいたでしょうか、私達二人を安じつ帰って行ききました。(頑張レ、頑張レと言いつつ)

避難所での生活も少しづつ慣れたころ、窃盗団が出はじめたとのこと主人は震災後手付かずの家で寝泊りすることになりました。一人で不安だつたかと思えます。

甥が応援に来てくれ、少しづつではあるが片付けがはじまりました。私も自宅に戻り、不自由なところでの生活がはじまりました。幸いにも遠方にいる主人の友人の方々から発電機、食料、衣類等々たくさんさんの支援をいただき本当に助かりました。

少しづつではありますが片付けも進んでおります。時間も経過している中で記述です

ので不明瞭な点多々あるかと思えます。

この度の災害の中で多くの人々との係わりの中で少しではありますが人間模様を垣間みたような気もしました。

いまだに余震が続いておりますが、1日も早い復旧、復興を祈るばかりです。

又、N.T.T各機関からの支援に対して、主人共々心から感謝申し上げます。

追伸、昨年から家族が増えました。シェパード犬で名前はゴフーです。心いやされています。



愛犬ゴフーと庭で

あの時、そして

石巻電友会
伊勢 栄

「津波なんか来る筈がない。夕方まで帰れるだろう」との軽い気持ちでの避難。1番の必

需品である水。懐中電灯、携帯等持たずに、隣接の石巻工業校に避難、常備していた非常袋を持つ事など思い浮かばなかった。3階の教室へ誘導された。廊下にはラジオがつけっ放しで、刻々と被害状況が流れていた。貞山堀の決壊により学校の裏門から正門に向って津波が勢いを増して流れ、我が家を見ると出窓の高さまで、水嵩が増していた。その時の状況に、頭が真っ白になった事を覚えている。勿論、インフラは全く用なし、水を持参しなかつた為、一口も飲まずじまいだった。3日目の朝、工業高校の校舎全体が水浸しとなり、支援物資が搬入不可能のため2次避難の通告があり、5つの学校が指定された。専修大学と河南東中学校の2校は遠方のため、自衛隊の車両で送られ、あとの3校は、蛇田小・中学校、蛇田公民館。蛇田小学校は自分達の希望であつたので、自分の足で移動するよう指示があつた。妻は膝関節症で痛む足のため、荷物を持つ事は不可能だった。多くない荷物だったが自分が背負った。口道沿いまでの移動は、高齢者と病弱の方は県警のゴムボートで5人乗りが一艘。健康者は体育館が浸水のため、生徒の机を出口まで普べて、橋代りにして渡りきった。蛇田小での途中、高玉神社で味噌汁の炊き出しがあつた。3日振りの熱々

のご馳走になり、身心ともに温まり感激でした。蛇小に辿りつき受付を済ませた。体育館は既に満杯そのもの。3階の教室に誘導された。すぐにイチゴ5粒ずつの分配を受けたが、久し振りの食料は実に美味しかった。寝具類も充分にあつたように思えた。1階から3階まで運び込むのに何度往復した事か、蛇小での避難7日目に、仙台から娘夫婦が迎えに来た。つまり第3避難の始まりである。薬とか身の回り品など持参して行きたかつたが、車のガソリンの残量が心配なので無理との事。仙台へ直行するからと。いま思えばあつという間の35日間の避難生活だった。仙台の家も、インフラは駄目。日中は、掃除洗濯等で、1日はあつという間に。水がないのに、乾麺を買って来て、妻に笑われた事などもあつた。あの8月には、泉区の整形外科で妻の右足で入院一ヶ月。石巻での留守中は、連日、瓦礫処理、大工さんへの手配等よくぞ頑張れたと思う。その翌年の2月にもまた片方の足を手術、矢張り入院一ヶ月。単身経験はあつたものの、あの三陸道を何回往復した事か。淋しさを乗り越え、また特に体調を崩す事なく乗り越える事が出来た事はなにかしら今でもあの自信に繋がっているかも。地震津波、すぐ高台へ逃げろは、合言葉になつてはいるが、仲々

実行は難しい事もあるようだ。この間の新聞に、当市の渡波地区（高台が少ないそうだが）避難タワーの整備計画が報道されていた。高さ12・5m、鉄骨造りで震度7にも耐えられると。200人収容可能。民間施設を市の基準に合えば認定して計4か所整備するそうだが（来年度に完成予定）1日も速い完成が望まれる。東北地方には、全国の原発の関連施設の30%〜40%が作られているとか。地元の女川原発（3基）は、冷温停止中だが、賛否両論あるにしろ、安全、安心の説明など、より一層の広報が希まれる。県内の一部の自治体ではあるが、再稼働反対の意見書を議会として、可決したそうだが、PRにも一工夫あっても良いのでは。さて、原稿をここまで書いて来て、ふと、思った。老骨も来年は米寿か。百寿（百歳）まで、辿りつけるだろうかどうか？ひとり合点しつつペンを握ります。



いついつまでも二人で仲良く元気

私の東日本大震災記録



石巻電友会
伊藤 誠七

私は平成23年3月11日、津波により妻と家を失いました。家は全壊となり、妻は1階で亡くなりました。2階まで昇れば助かったものを津波は来るとは思わなかった甘い考えがあつたからだと思います。私はその時、会館（地区の集会所）で管理人を依頼されており、友人数名と卓球をしていました。午後2時45分頃ゴーというもの凄いな音と共に会館が揺れました。卓球台にり縋りつき、長く感じた地震に堪えました。やがて地震もおさまり卓球の仲間は帰宅しました。自宅に電話したのが通じなかつた。残務整理をして帰宅しようとしたら近所の人達が今大津波の警報があり会館に避難にきましたと多くの方が集まりました。夕方になり100名位になりました。津波の水が2階の窓までもう少しで入りそうにもなりました。その夜は寒く、窓のカーテンを引き切つて防寒にあてる人もいたし、トイレも使用できず、その処理が大変だった。食事もなく水もなく2日間ほど過ごしました。3日過ぎてから市役所とも連絡がとれ、食事、水も用意されました。自衛隊より食事の援助

があり、カレーライスを食べました。こんなにおいしいものが世の中にあるものだと驚いて食べたことが思い出されます。

それから1週間など過ぎてから親戚の家に引き取られて世話になりました。

運よく4月末には仮設住宅に入ることができました。嫁夫婦と孫二人の5人家族で3部屋だけです。それでも暖かい布団に寝られることで充分でした。それに石巻電友会の会長より全国の電友会の皆さんからの多額のお見舞金を戴きました。大変ありがとうございました。

震災後、2年7ヶ月になりましたが、さつぱり復興の姿は見えてきません。それでも土地を売りたい方、復興住宅に入居希望の方とか市役所より照会等があり、少しずつ進んでいるのかと思われれます。幸い私の土地は家を再建してよい地区ということで家族会議を開きました。今年3月に高校を卒業し、石巻のある会社に就職したばかりの男孫が、おじいさんの土地に家を建てようということになりました。来年の秋頃には建築することになりました。

また来年の4月からは会館を復旧し、卓球仲間と遊ぶことが出来るようです。私は現在80歳になりますが、神様に召されるまでは元気に何ごとにもがんばりたいと思います。

今年も電友会の総会が12月に予定されています。皆さんとお逢いし、お話しをすることを楽しみにしております。

予知できず突然襲ってくる地震

恐ろしい体験を風化させず後世へ



石巻電友会

山田 千秋

「地震・雷・火事・親父」とは、昔の人がこの世で恐ろしいものを順にならべて言った言葉です。現代は、これに原水爆・公害汚染がつけ加えられることになるでしょうか。東日本大震災は、太平洋沿岸の広範囲の地域に原発事故を含む大災害をもたらしました。核兵器は人類愛で廃絶にもち込むことは出来ません。公害汚染も人間の英知を結集して防止することは出来ません。

地震は現在の科学力でも、ある程度の予知をすることはできませんが、被災地域の範囲や発生時間帯はおおよその予測になり発生直前・直後にならない限り何時、何処に、どれ程のものが来ることまで知ることは不可能です。まして人間の方では起きた地震を制止することも縮小することも不可抗力です。地

震は大人も、子供も老人も、幼児も人々が日々の平穩無事な生活をしているときに、突然に襲ってくるのです。

東日本大震災の発生時刻は14時46分でした。日中で人々が活動している時間に発生したことは、まさに不幸中の幸いでありました。これらもし厳寒の深夜に人々が睡眠しているときに発生したならば、死亡・行方不明の犠牲者の数は想像もできない大惨事になっていたことでしょう。

住んでいる町内の身体不自由で歩行困難の人、高齢者、病気で寝たきりになっている人それに付き添う介護の人、逃げたくても逃げられずに犠牲者になった人のことを思うと今でも悲しみに胸が痛みます。

目前に広がる見渡す限りの光景は、無惨に破壊された住居と家財の残骸。樹木も見えない、雀もいない、鴉もいない、犬もいない、猫もいない。全くの死の世界です。

広い遺体安置所は消息不明の肉親をたずね歩く多数の人影。収容した柩の前で泣きくずれる人。火葬の予定がとれずに次々土葬で仮埋葬される遺体。まさに地獄絵を見る悲惨な思いです。地震の揺れを体感している間の人間の心理は、恐怖におののき、そのときの思考は「家が潰れる」「いつまで続くのか」「こ

れより大きくなるな」「早く静まれ」と心に念じてただじつとしていただけです。人間は本当に怖いときは言葉は出ないのです。

地震の揺れはとても長い時間続いたと記憶しています。「1分ぐらい続いたのかな」と言う人もいれば「2分ぐらいだろう」「いや時計を見ていたが3分ほどだ」不気味な地鳴り、揺れはおさまる様子はなく弱まりそうになるとまた強くなり限りなく続くのではないかと思われました。

これが地震の恐ろしさです。この世で一番恐ろしいものは地震です。この言葉は後世に語り継ぐ真理です。



五ッ橋クラブ 桐ヶ窪 明夫

震災時をふりかえって

五ッ橋クラブ
天野 哲雄

3・11の震災時は妻と一緒に多賀城市内をドライブ中、急に車のハンドルの自由がきかなくなり、あわてて路肩に車を寄せ地震の治まるのを待ったが、その時間の長かったこと（約2分間程）と、揺れの激しさで車ごと飛ばされるのではないかと必死の思いでハンドルにしがみついていたのをいまだに忘れることができせん。揺れが治まった後、無我夢中で車をとばし約30分後自宅へ到着し、建物が無事だったのを確認したときはホッとしました。私の家は海岸から約3キロほど離れており、普段から津波が来ることは想定しておりませんが、家の前には農業用の堀（約5〜6メートル巾）に水が逆流して来たのを見て、とつさに津波だと直感し、直ちに妻と一緒に何も持たずに車で避難したため一瞬の差で津波にまきこまれることなく、運よく難を逃れることができました。

その後自宅のある地域は危険区域に指定されたこともあり、一時立ち入りができませんでした。5日目にガレキをかきわけながら、やっこの思いで自宅にたどりつきましたが、

家は膨大なガレキにうめつくされ、足のふみ場もない状態でした。自宅付近の津波の高さは約1.5メートル位でしたが、津波によりドアが破られ、家の中の1階部分は家具や家財道具が氾濫し、一面ドロに覆われた状態（約20センチ位）どこから手をつけたらよいか茫然と立ちつくすだけでした。その後約2カ月間はドロとの戦いの毎日でした。家屋の1階部分は全面的にリフォームをしました。が、しばらくは床下のドロによる悪臭に悩まされましたが現在は大分落ちついてきております。



荒浜から流れついた流木

その様な時に全国の電友会の仲間の皆様から暖かい義援金や励ましのおことばを頂戴し、それを励みに、ひるんだ気持ちをおさめたこと、最悪の状態を脱することができました。お陰様で現在は以前の生活に戻ることができました。

自然災害の恐ろしさを身をもって体験した反面、多くの仲間達のありがたさを痛感した震災でした。ありがとうございました。

「3・11」を忘れないで

五ッ橋クラブ
大友 健弘

1. 3月11日。午前中市内の町内会のイベントに出演後引続き賑やかな昼食会。午後3時からの講演のため2時30分会場のホテルに入る。着替中に地震発生。帯を締めないまま廊下に伏せる。講演会は当然中止。午後4時30分仙台駅からの地元TV出演も中止に。

2. 仙台駅前のバス・タクシー乗場は大混雑。交通手段がないため、自宅まで人混みの中を2時間以上黙々と歩く。雪が降ってきた。玄関には何とか入れたが戸が完全には閉まらな

い。家の中は真っ暗。持っていた懐中電灯を頼りにガムテープを探してとりあえず塞ぐ。室内はメチャクチャで床は壊れ物だらけ。歩くのが危険なので予備のスリッパを履く。かたづけは夜が明けてからと決め、仏壇のろうそくを点け、ありもので食事。疲れたのでできるだけたくさん着こんで眠る。

3. 夜が明けると早速食料調達。玄関の戸が完全には閉まらないのが気になったが、営業している店を見つけて6時頃から並んで待つこと3〜4時間。1人1〜2品しか買えないので選択に迷う。幸い水と菓子等の置き置きがあり何とか凌ぐ。インスタントラーメンに水をかけて食べてみたがまずまずいける。近所の人達と営業している店の情報を交換しては行って並ぶという生活が何日も続いた。妻を10年以上前に病気で失っているが、こんな時にいてくれたらどんなに心強いだろうと思うとやるせなかつた。

4. 被害状況。家回りは一部損壊、室内は半壊（地震保険から若干見舞金が出て助かった）。余震とみられる4月7日の地震も相当に揺られて外回りがさらに傷んだが半壊扱いにはならず。工事の稼働不足とかで2年以上たつたまま完全には復旧していない。

5. ライフラインは電気、水道が比較的早く

復旧したものの、ガスは市内で一番遅い4月下旬となった。一番困ったのは風呂。営業している浴場を探し、何時間も並んだうえに入浴時間の制限もあったが入れるだけましかな。まだ寒い時期だったのであまり汗をかかず助かった。夏だったらと思うとゾツとする。また、電気通信サービスの重要性を改めて感じた。現役時代、関連業務に従事したことを誇りに思うとともに、今後一層の充実、発展を期待したい。

6. 今回の震災を機に①室内の備品の見直し②飲料水の箱買い③日もちする食品を選び消費期限順に並べ早いものから食べて補充④ボンベ式ガスコンロ購入⑤近所のお付き合い強化等に取組んでいる。

7. 終りに趣味の落語を活かした活動を息長く続けていきたい。具体的には被災地等の慰問。災害FM等への出演。防災に関する講演会の講師やパネラー、震災の風化を防ぐための語り部の役割、復興に関連した歴史や人物を扱った落語の創作と口演（「四ツ谷用水伝」

「支倉常長伝」等）



復興にかける祈りの気持ち



五ッ橋クラブ
奥 京子

私の住んでいる巨理郡山元町では、平成23年の東日本大震災で674名の方が犠牲となりました。山元町全体では地震の後の津波もあり、全壊家屋が2217棟、大規模半壊が534棟、そのほか半壊と一部損壊を合わせて1687棟と甚大な被害を受けました。

現在でも応急仮設住宅は町内8か所にあり、1030戸、25000人近くの町民がそこで生活しています。私の家では屋根瓦と食器が壊れた程度で、家の中は棚から落ちてきた本や飾り物などが散乱し足の踏み場もない状態になったことと、当日、坂元駅に置いていた私のミニバイクが津波で駅舎とともに流出しましたが、被害というほどではありませんでした。私は地域の婦人防火クラブの地区会長という立場だったので、翌日から公民館に被災者への炊き出しのために毎日通いました。電気も水道も使えない状況でしたが、お米や野菜は地域の人たちが持ち寄ってくれたので何とかかなり、水は近くの湧水を町内の方が農業用の大きなタンクに汲んできてくれ、燃料は大きなプロパンガスボンベを使うことが出

来ました。町内の方の連帯の力は想像以上で炊き出しのおにぎり500個を30分前からずいぶん作ってしまう底力には感服しました。地区の女性の方々には、ローテーションを組んで毎日7〜8名の方に炊き出しをしていただきました。3月末に自衛隊が支援にきていただきました。毎日、公民館で炊き出し作業をしました。電気が使えないので携帯電話の充電も出来ずトランジスタラジオが唯一の情報源でした。そんな大変な状況でしたが、人は人によって支えられていることの温かさを実感していました。当時はガンリンが入手難なため、各家庭でも食材の確保は大変な状況にありながら、お米や野菜あるいは調味料などの差し入れや、毛布や防寒のための衣類なども沢山提供していただき、被災者へ届けることが出来ました。その後、炊き出しについては役場で臨時職員を雇うようになったので炊き出しボランティアに行くことはなくなりました。それでも、何か私に出来ることはないかと思案するようになったときに、雑誌に載っていた手作りの「布地藏さま」を思い出し、真似をして作ってみました。手のひらサイズで小さなものですが、私自身が心を癒されるように感じて、津波で家を無くした友人やお世話になっている人たちへ作って差し上げま



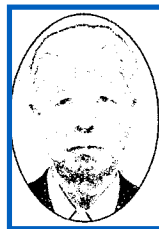
春待ち地藏

した。少しでも心が癒されますようにという祈りをこめて作っています。そのうち、友人から2個あるいは5個作ってほしいと頼まれるようになり、この2年半で80個ほど作りました。町の復興はまだまだ進んでいません。

JR常磐線は津波で駅舎や線路が流されたところもあり、代行バスに乗っていると見知らずの方から震災の体験について話しかけられることが多いです。身内の方を亡くしたとか家が流されたとか、皆さん辛い体験を誰かに聞いてほしい、誰かに話したいという思いなんですよね。バスに乗っている40分くらいの間、私はうなずきながら聞いているだけですが、降りるときに「話を聞いてくれてありがとうございます」と言われることが多いです。話すことで少しでも元気を取り戻すことができればと願っています。現在は、東日本カウンセリングセンターの専任カウンセラーとしての傾聴ボランティア活動や山元町復興支援セン

ターに行ったりしています。町に住む人々すべてに希望と笑顔が戻ることを祈っています。合掌

魂に刻む震災の悲劇

五ッ橋クラブ
小坂 仁

青葉城ガイドの帰り仙台駅前で地震にあった。倒れた老夫婦が私の手を放さず泣きじゃくる。駅前の人々で埋まり阿鼻叫喚の地獄。雪の中を3時間、6時に着いた。屋根は傾き瓦が落ちた。暗闇の中に青白く光るものがあった。ギリシャ神殿の女神像の折れた片腕が光ったのだ。思わず阿修羅を抱きしめた。弥勒菩薩像の破片が頭に落ち、しばし動かれなかった。長町の十八夜観音、荒町の満福寺の毘沙門像、中田落合の観音菩薩は倒れたのか。眠れない夜が続いた。福島原発から60キロ付近に住んでいる長女の教師は、避難を望まず助け合いながら生きるこの尊さを教えてください、との連絡があった。

まほろばの里、福島は現在も放射能に晒され故郷に帰れない人々が呻吟している。宇和島からコメ、味噌、ラーメン、天然水が届い

た。送り主は電電時代の研修生。「祖先は仙台藩士の末裔です。宇和島の歴史は政宗の長子、秀宗が宇和島の城主となり町を開いたのです。決して忘れてはおりません。悲しみに耐え仙台人の底力をだして下さい」。とめどなく涙がこぼれた。「政宗の温かい血が今も生きています」。とも書いてあった。信越のNTTの友からは「愛の前立て」で有名な直江兼統の兜の絵と「こしひかり」が届いた。宇和島の命の水を飲み、炊きたてのご飯の味は忘れない。家内が日赤のボランティア。救援物資が破れた玄関に山積みとなった。思い出は尽きない。改めて全国の皆さんに感謝し心から御礼を申しあげねばならない。あれから2年半が過ぎる。

瓦礫が撤去され、道路が修理されてもあの人は帰ってこない。祈りをこめた灯籠の笹船が広瀬川に流れてゆく。涅槃の世界まで届いて欲しい。「母と子を津波に奪われました。何故、私だけが生きているのですか。」イギリスのBBC放送記者を石巻の避難所に案内した時の証言である。女性の記者は涙ぐみながらカメラをまわした。

日本人は思いやりに溢れ、謙虚で慎みぶかいですね。慈愛に満ちた絆で結ばれ寡黙で辛抱強い東北人の心情を垣間見たのかもしれない

い。「荒浜」で波にのまれた竹馬の友は未だ見つからず悲しみは消えない。彼は地名の研究者。仙台という地名の由来を「千体仏」に求めた。共に沖野の満蔵寺の千体仏を参拝する予定であったのに。

町や市民生活が復旧されても失われた命の復活はあるのだろうか。彼の魂は無事に三途の川を渡り浄土の世界に着いたのだろうか。一日千秋の思いで待っている。震災の悲劇は日々薄れゆく。蛸に吸いつかれた観音様が貞観の津波に流され長町まで辿りつき、祀られたのが蛸薬師如来。慶長の津波の悲劇を忘れないために建立されたのが若林の「波分け神社」である。震災の歴史を魂に刻み後世に伝えるのが残された者の責務ではないだろうか。あなたは歴史を忘れても歴史はあなたを忘れない。

東日本大震災の経験を語る―あの時私は―



五ッ橋クラブ
平山 典明

平成23年3月11日からもう直ぐ3年になるうとしています。1年目は瓦礫処理が進み、だんだん荒野が広がっていくとともに、生活

のためにプレハブを建て商売を始める人々がボツボツと現れてきておりました。

人が集まるのは、スーパー、ホームセンター、コンビニ、そしてなぜかパチンコ店、更地になった土地には雑草が驚くほどの勢いで生え繁り、街には商店が殆んど無い、その情景が、毎日目に入る生活は味わったことのないものでした。

こういう状況の中で、希望を失わず一歩一歩復興に向けて取り組んでくれたのは、全国的な復興支援という大きな支えがあったからだとつくづく感じております。特に、私は当時所属しておりましたテルウェル東北(株)の小野寺社長をはじめ、かつての先輩や同僚及び会社・団体等NTTグループの皆様から励ましの言葉、支援物資、支援金等多くの温かい応援を頂き、周りの方々よりは恵まれていることを痛感すると共に、皆様方から感謝いたしております。NTTに入社してよかったですと一番思った時だと思えます。

震災後2年目に入ってから、建築関係の建設者や資材が日増しに増えてくるのが実感できるようになり、銀行や会社等の建築が彼方此方で見られるようになりました。

3年目に入る頃には、一般住宅の建築が急増し、今や建築ラッシュといった感じです。

私も、障害者の兄と暮らせるよう3月から新居の建築にかかり、先日完成し、引っ越したばかりです。残念ながら、兄は新居の完成を見る前の5月に急死してしまい、震災当時同居していた津波で亡くなった叔母の許へ行ってしまいました。

私自身、小学5年生の時に「チリ地震津波」で家屋流出、NTT入社後は仙台で宮城県沖地震と過去にも災害に直面してきましたが、今回の東日本大震災は、正直、過去の災害等とは、比べものにならないほどの衝撃でした。チリ地震津波の時は両親や家族が健在で、私は大変そうな両親の姿を見ていただけでした

し、宮城県沖地震の時は自宅（社宅）は大きな被害はなく会社は上司や仲間と復興に取り組めたことで、個人的にそれ程大きな衝撃は無かったように記憶しております。

しかしながら、今回は家長としての立場で自宅全壊・親族親戚7名（震災時に4名・震災後に3名）が亡くなった現実、味わったことのない打撃でした。現在のように立ち直れたのは、NTTグループの皆様のご支援のおかげと改めて御礼申し上げます。

本当に有難うございました。

最近、異常気象等の被害が各地で多く発生しており、また、原発事故の後遺症も依然として続いており、心痛む日々を過ごしております。災害にあわれた皆様に一日も早く平穏な日々が戻ってくるよう祈念しております。

その時 私は！私の家族は！



五ッ橋クラブ
菅原 弘

平成23年3月11日午後2時46分三陸沖を震源とする東日本大震災は、高台にある我が家にも激震が襲ってきました。

私はその時、セントラルスポーツで80mのコースでランニング中、震度7の激震で暫し支柱に掴まり揺れが収まるまでの間必死でした。

クラブの中はロッカーが移動し、プールの天井は落ち各階立ち入り禁止、私達は職員に誘導され比較的安全な1階ホールに集められバスタオル2・3枚配布されて、余震の揺れが治まるのを待つこと数時間やっとロッカールームでの着替え、駐車場へ心配した車は何事もなく帰路に、途中交差点には警察官が立ち誘導したので安心して帰宅出来ました。

感謝！

我が家では家族は音大生の孫の発表会で上京中で留守、無人の我が家は玄関、居間、台所足の踏み場もないほどに食器棚からすべての食器は落下粉々、押し入れから布団等が襖を倒して散乱、大変な状況でした。（写真）もし、あの地震の時に家族が家においたら



上：津波で流失した自宅跡（左下）
下：現在の流出した自宅跡（現在は駐車場）
新居は山手の方に建てました

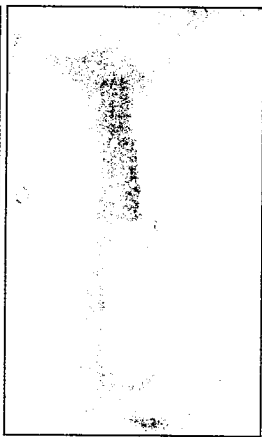
大怪我をしたのではと思いました。余震が続く中、スコップで食器棚から粉々に落ちた瀬戸物をかき集め居場所を確保、電気・水道・ガスのない夜を迎えた。

その夜は粉雪がちらつく寒い夜でした。私と仕事から帰宅した息子と余震の続く家の中は怖く、各々車で一夜を過ごしました。幸い車にはラジオ・テレビが完備、刻一刻報道される大地震・大津波の状況を見て驚き、眠れない一夜過ごしました。

旅に出ている家族との連絡は全く取れず、家内は地震発生時は新幹線の中、大宮・上野間で列車から降ろされ近くの学校で毛布一枚の寒い一夜を過ごし大変な思いで、翌日府中に住む妹と息子に確保され、娘・孫達は幸い



食器棚から落ちた瀬戸物

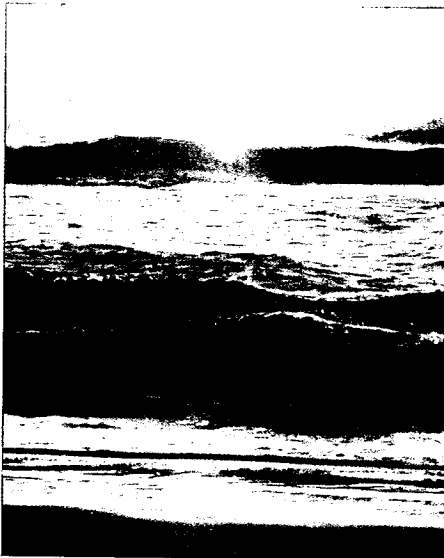


襖を倒して布団等が散乱

に溝の口のマンションで無事、家族6人の安全を確認出来ました。しかし新幹線・高速道路が不通仙台に帰宅したのは半月後でした。

私の地震発生の翌日からの生活は、先ず飲み水の確保、水の入る容器を探し、台原森林公園入り口の給水場へ、飲み水を求めて長蛇の列3・4時間待ってやっと水を、地域の人々がバケツ一杯を求めため行儀よく待つ光景に日本の素晴らしさを感じました。

余震も治まり、我が家は「西北」に若干傾き、畳と敷居、柱と壁が隙間だらけ、ガラス戸は閉まらず、お風呂のタイルは落下など「大規模半壊」の状態でしたが、県・市からの義捐金・見舞金等で今は家族6人以前の生活に戻ったことは本当に感謝の気持ちで一杯です。また、全国の電友会に皆さんからの多額のお見舞金を頂きありがとうございました。



追波湾に昇る朝日(石巻市北上)

東日本大震災で親友夫妻を亡くす



五ッ橋クラブ
若松 芳陽

1 大震災発生その時私は

太白区役所近くの7階建ビル1階の選対事務所(仙台市市会議員候補者・NIT労組組織内4期目挑戦岡本あき子市議)の選挙事務応援をしていた。

3月11日午後2時46分18秒、ビル全体がギシギシ、ガタガタと音がして体が揺れた。誰言うもなく「地震だ!」テーブルにしがみ付いたが、揺れが強くなりテーブル上の物が滑り落ち、テレビや電話も床に落ちた。7人全員が道路に飛び出したが、建物、電柱、立ち木、何もかも揺れ、立って居られず、街路樹の根元にしゃがみ込んで促まった。

揺れのおさまるのを待った。その揺れはどのくらい続いたのかその時間は、長らく、長らく感じた。(注1)

揺れがおさまったところで事務所に戻ったが、事務所内は、足の踏み場もない。

暫らくの間、ボートとしていた様に思う。兎に角事務所内はそのままにして、それぞれ帰宅する事にした。

自宅への電話は不通、帰宅への道路は亀裂

でデコボコ、雪の降る中、急ぐ人、人で思うように歩けない始末、足元を確かめながら歩いて通常30分行程のところ50分を要した。

家族6人中、5人が午後8時まで何とかならず帰宅、息子は勤務先の関係と交通渋滞で午後11時帰宅、幸いな事に家族全員怪我も無く無事。

我が家の被害は、家の基礎部分の亀裂、液化現象により側溝が潰れ、ガラス戸の枠がずれロックが効かない、食器類の破損程度だった。一瞬にして電気、ガス、水なしの生活それでも日常生活は出来る状態。(一部損壊程度)

2 市内若林区の被災状況をラジオで知る。



ラジオのニュースで市内若林区内の荒浜、井戸浜地区が巨大津波により壊滅的な被害とのこと。早速、井戸浜の親友(ボウリング仲間)宅へ電話を掛けたが通じない。間を置いて何度も掛けたがダメ。

親友の安否を案じながら10日間が過ぎた。そして、3月21日の河北新報の「亡くなられた東北の方々」欄に案じていた親友の名前が載っていた。奥さんの名前も。「何に！」と声を出したが、後は涙を抑えるのが精一杯だった。(注2)

居ても立っても居られず、早速自転車で井戸浜の現地確認へ出掛けた。自転車で途中まで行き、泥沼の道を歩いて集落近くまで行つたが、ある筈の家・集落がなく、田圃の中には倒壊した家、トラック自家用車などが逆立ちした有り様。大袈裟に言えば地獄の絵を見た思いだった。親友の家は全く見当たらなかった。

帰り道、六郷交番所に寄り「井戸浜地区の方々の避難所が六郷東中学校の武道館である事がわかった」ので武道館へ、ところが親友の遺体は、既に市内某葬祭会館へ搬送安置されて居るとの事だった。

さらに、自転車で葬祭会館へ。会館の2階には驚いた事に、100体ほどの遺体が安置

されており、その中から親友夫妻の氏名立て札の棺を見つけた。

棺へ手を掲げ「ようやく、やっと会えたね」と棺の中の親友に声を掛けた。後は、涙…涙。

棺の安置された葬祭会館へ毎日焼香に出向いた。そして、3月29日火葬、葬儀の日、祭壇に「お別れのことば」を述べ、最後のご焼香をさせてもらった。合掌。(注3)

(注1) 気象庁は、2日後に「マグニチュード9.0世界最大級、南北約500キロ東西約200キロの巨大な断層(岩手県から茨城県沖の海底)が最大20メートル動き、揺れは約6分続き最大震度7を観測した」ことを

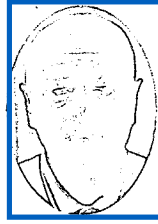


発表した。

(注2) 後で聞いた話によると、家が車が人が目の前で津波に飲み込まれ流されて行くのを唯見てるだけだった。そして、流された家の中から二人一緒に発見されたとのこと。

(注3) 火葬、葬儀は終ったが、菩提寺、墓地ともに津波で流失し納骨することが出来ずにいるとのこと。

自宅の被災状況と復興支援



仙南OB会
千葉 定一

地震で思うこと。私は①1968年の十勝沖(青森市内で)、②1978年の宮城県沖(五橋の電々ビル6Fで)、③1983年の日本海中部(大館郊外で)地震に遭遇して以来地震恐怖症となり、寝て居ても震度1 or 2でも目がさめ、起き上げる様になった。今回の大震災(3.11)の2日前(3/9)、えぼしSKI場に行っており、11時46分頃、スノーボードの修理台に腰をかけておにぎりを食べて居た時に震度5弱の地震がありました。後で地震学者の話して分かった事ですが、「相次ぐ大きな余震が巨大地震の前触れだったの

かもしれない」だが後の祭りだった。東大地震研究所あたりの巨大地震の予言がなかったのが残念でした。

大震災の時はカミさんと2人でNTVの「ミヤネヤ」の石原前東京都知事の会見を観ていたが、余りに強く長い揺れであわてて庭に飛び出しました。余震が余りにも長く、家に入れず、入って見たら、食器は全部散乱しレンジ、仏壇は飛び切り、2Fのピアノはスライドして壁紙を破りつつ込み、衣類箱、書籍は散乱し、手がつけれず、ただ呆然としておりました。建物は地盤が悪いがセキスイハイムなので異常が無かったが、道路向いの古い自宅、蔵、外風呂の倒壊がひどいので、歩道にカラーコーンを並べました。2日後、役場の担当が現調に来て「イエローカード」が貼付されたので2次災害が心配なので友人の奨めもあり、解体業者の稼働がOKとなったので早急に発注し、5月の連休前に完了しましたが、頭が痛かったのは解体費用(約2百万強)が住んでいた住宅でないので補助が出なかったことです。

それと苦労したのはやはりライフライン(E/5日間、W/13日間と携帯電話の不通)のSTOPでした。町の給水車に水と炊出しのおにぎりをもらいに4・5日通いました。

その間、高校の同級生、大学のヨット部OB、専門部の同級生からのお見舞いと激励により「PTSD」気味で意気消沈していた所を克服できました。

こんな状況だったので「復興支援」には全然顔も手も出さず、遠くから見守るだけでしたが、「飲みと食事」で若干貢献をしました。

仙台駅前(さくらの北)に開店した「復興支援酒場」仙台店にちょこちょこ寄り岩手、福島のお酒とうまい肴を飲み、食べました。店長から東京、銀座店も開店したことを聞いたので上京の際に元・宮通時代のU課長、元近畿通建・現ミライトの子会社の東京支店Kさんと被災前の沿岸部の設備、風景を思い出し乍ら、おいしいお酒を飲みました。残念乍ら両店共に予定した支援金が1千5百万になったので復興酒場は7月に閉店し、銀座店は以前の「秋田川反漁屋酒場」として営業するそうで在京の2人はまた寄ってみたいと言っております。ぜひ「東北のために!!」足を運んで下さいとお願しております。



震災帰宅に5時間半

大崎クラブ
我妻 政信

私の住んでいる宮城県大崎市古川は仙台市から北へ約40キロ石巻市から西へ約40キロ大崎平野の中心部に位置する所にあります。今回の震災では、津波も大きな倒壊等の被害も無かったが、帰宅時に使用する公共交通機関が全面停止の状態に遭遇しましたので、それについて述べて見たいと思います。

当時、私は大崎市から仙台の五橋ビルに通勤していた。地震の揺れが治まるとビル警備の担当者から館内放送で「避難命令が出たので速やかにビルから出るように」との案内があった。職場毎に徒歩(停電の為エレベーターは停止)で階段を下りたが、何時もの模擬演習と違い、皆無言で行動していた。安否確認が終わると即解散、職場に戻らなくても良いので、皆、三々五々自分の使う交通機関等を目指して散って行った。

私は仙台駅に向かったが、JRの新幹線も普通列車も止まっているとの情報を道行く人々から伝え聞いた。携帯電話も使えない、停電の為交通信号も点滅状態、当然道路は車の列で数珠繋ぎのあり様だった。

駅に着くと、JRの高速バス(古川行)が止まっていたが満席の状態だったので次の便にしようとして列に並んだ。ところが、このバスから乗客が降り出したので訳を聞いてみると「高速道路が全面ストップとなったので降ろされた」との事だった。

隣のバス停を見ると、一般道路経由は動いている。「これに乗って(小野田)に行き古川まで、戻り約10キロメートルは歩こう」これに賭ける事に決め、このバスに乗り込んだ。バスは市内を徒歩よりも遅く走り時々余震を感じながら郊外に出た。国道は上りも下りも車の渋滞が発生していた。小雪の降る中、幾つかの徒歩の集団を見た。

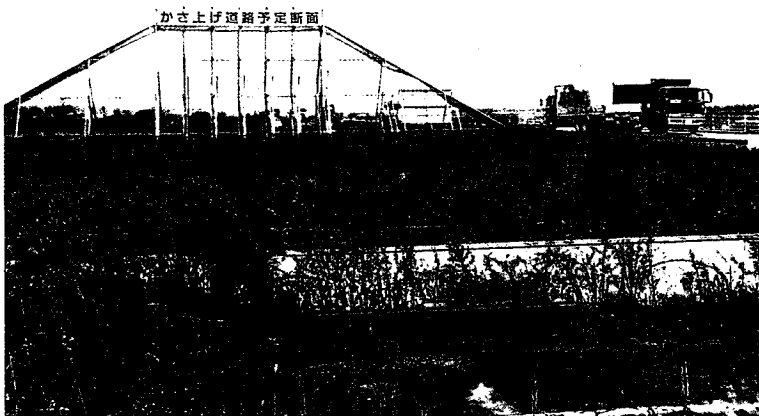
途中バス会社の営業所で『トイレ休憩』を行ったが、その時乗客の中から、バスは古川の車庫まで行くのであれば、古川まで行く15名を乗せて欲しいと要望したら、会社側は「災害時なので」と快く聞き入れてくれた。

バスは暗闇を走った。明るい所は工場や役場等の施設であった。突然渋滞が発生するがそこは、「ガソリンスタンド」だった。もうガソリンの心配をして給油に向う車が列をなしていた。コンビニの前も同様だった。

車内は何故かラジオが聞こえなかった。乗客はメールと携帯電話を使い情報を得ようと

必死だったが、徒勞に終わった。首都圏からは着信できたので、それが情報だった。津波の情報も誰かに来た携帯からの情報だった。私の携帯には東京の娘からのメールが一度だけ届いた。そして電池が切れた。

こんな状態で古川まで約5時間30分かかったが、雪と寒さから逃れ、体力の消耗も少々に自宅に戻った。自分の部屋に入ったら、ベッドに和ダンスが落ちていた。睡眠中の地震だったら、この原稿は無かっただろう。



名取市開上地区の復旧工事 (撮影:五ッ橋クラブ 松田 忠)